東海大学資格教育研究
第５号
DOI: 10.18995/24367664.5.63

〈実践研究〉

プロアクティブ生徒指導が生徒の自己有用感形成に及ぼす影響

―中学校における「関わりを大切にした支援」を基盤とした実践研究―

江森　克弘

1. 序章

「生徒指導提要　第Ⅱ部　個別の課題に対する生徒指導」の各章にあげられている今日的課題は、いじめ、暴力行為、少年非行（飲酒・喫煙や薬物乱用）、児童虐待、自殺（自死）、中途退学、不登校、インターネット・携帯電話に関わる問題、性に関わる課題、多様な背景を持つ児童生徒（発達障害、精神疾患、健康課題、要支援の家庭環境）の指導など、多岐にわたっている。筆者は 22 歳で教員となり、61 歳で校長として定年退職するまでの 39 年間で、５校の公立中学校に勤務したが、ここに挙げられている課題が皆無の学校は一校もなかった。むしろ無かった課題を探すほうが難しい状況で、指導の確立や実際の対応等に膨大な時間と労力を費やしてきた。生徒指導＝課題対応というような意識が強かった時期も少なからずあったが、生徒指導主任になった頃から、力を入れるべきは、課題未然防止や児童生徒の発達支援ではないかと考え始め、管理職になった時には、その思いがさらに強くなった。いわゆる常態的・先行的（プロアクティブ）な生徒指導がしっかりできれば、即応的・継続的（リアクティブ）な生徒指導を減らすことができる、即応的・継続的な生徒指導は、学級担任、学年主任、児童生徒指導担当など小集団での対応が中心となるが、常態的・先行的な児童生徒指導は、チーム学校として全職員で取り組むことができる、との思いからである。

中学校教育の現場においては、先ほどあげた今日的課題に加えて、コロナ禍における活動制限やコミュニケーション不足による人間関係の疎遠化が懸念される生徒に、「一人一人の個性の発見と良さや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、 自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支える」という生徒指導の目標に近づくことが求められている。

今回の研究は、常態的・先行的（プロアクティブ）な生徒指導を、「関わりを大切にした生徒支援」を基盤に、「チーム学校による生徒指導体制の構築」「生徒指導と学習指導の一体化」「成長・発達を支える生徒指導への転換」という３つの視点で組織的に実行したものである。生徒支援、生徒指導を充実させることが、生徒の自己指導能力の獲得を推進し、自己有用感を育むことに有効であることを明らかにすべく、実践研究に取り組んだ。本稿が明らかにしたいことは、相模原市立弥栄中学校におけるプロアクティブな生徒指導の取組が、「自己有用感」「つながる力」「乗り越える力」の形成に、どのような変化をもたらすか、という点である。

2. 支えとなる考え方

2-1　生徒指導提要

文部科学省（2022）の『生徒指導提要』では、生徒指導を「問題への対応」だけではなく、生徒が自ら主体的に学び、生活していくための力を“獲得”していくプロセスとして位置づけている。特に「自己指導能力」を育

成することが強調され、教室や学校の中で前向きな経験を積み重ねていくことの重要性が示されている。

(1) 生徒指導提要における生徒指導の定義・目標の変更と求められる生徒指導像

生徒指導提要（令和４年改定版）において、「生徒指導の定義」「生徒指導の目標」が次のように変更された。

生徒指導提要における生徒指導の定義

平成２２年度版

「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」

令和４年度版

「児童生徒が、社会の中で自分らしく生きる ことができる存在へと、自発的・主体的に成長や発達する過程を支える教育活動」

生徒指導提要における生徒指導の目標

平成２２年版　自己指導能力の育成

令和４年版　　児童生徒の自己指導能力の獲得

この改訂版で示された定義や目標で注目すべきは、「成長や発達する過程を支える」という支援の充実が求められている点が挙げられる。責任ある社会の担い手としての資質や行動力を、児童生徒指導を通して育成し、教育相談やキャリア教育等を通して、自己実現を目指す個人を支援していくことの重要性が示されている。学校現場でよく用いられていた「指導力」という言葉があるが、この改定では、「指導力」とともに「支援力」の充実が求められている。また自己指導能力の獲得を支える生徒指導では、多様な教育活動を通して、児童生徒が主体的に課題に 挑戦してみることや多様な他者と協働して創意工夫することの重要性等を実感することが大切であると示されている。

2-2　自己決定理論（SDT　Self-Determination Theory）

自己決定理論（SDT）は、Ryan & Deci（2018）によって提唱された動機づけの理論であり、人が健やかに成長するためには「自律性」「有能感」「関係性」という３つの基本的欲求が満たされる必要があるとされる。学校においては、役割経験や人間関係、主体的な参加がこれらの欲求を支える経験となり、生徒の成長を促すという考えである。

３つの基本的欲求とは、次の通りである。

○自律性・・・ 自分で選んで動けている感覚、他者に押しつけられてない、主体的である
○有能感・・・ 自分は役に立てる・できるという感覚、成功体験、役割、フィードバック、達成感
○関係性・・・ 人とつながれている感覚 仲間・教師・大人との関係が肯定的である

この３つの基本的欲求を実際の学校生活にあてはめると、

○自律性・・・自分で選び、自分の意志で関わる場面がある。
○有能感・・・役割を担い、達成し、誰かの役に立てる経験がある。
○関係性・・・安心して参加でき、仲間と支え合える関係がある。

となるように思う。

そしてこの３つの基本的な欲求が満たされることによって、内発的動機（心からやりたいと思う気持ち）が高まり、行動が継続しやすくなり、幸福感や自己肯定感が高まるという理論である。

3. 方法

筆者が校長を務めた、相模原市立弥栄中学校で実践研究を行った。

3-1　実践校

相模原市立弥栄中学校（19 学級　生徒 561 名　令和 6 年度）

3-2　実践校実践期間

令和 4 年 4 月～令和 6 年 3 月

3-3　研究構想

「関わりを大切にした生徒支援、生徒指導」を充実させ、生徒の自己指導能力の獲得を推進し、自己有用感を育むこと」を目的に、①チーム学校による生徒指導体制の構築②生徒指導と学習指導の一体化③児童生徒の「成長・発達を支える生徒指導」への転換、の３つの視点で、研究を行った。

3-4　検証

本研究では、アンケート項目のうち「行事参加」「生徒会・委員会活動」「地域活動・ボランティア活動」「つながる力」「乗り越える力」の項目を分析対象とした。これらは、心理学的な厳密な測定ではないが、生徒が学校生活の中で役割を担い、関係性を形成し、困難に向き合う経験を通して育っていく力を把握するための「代わりに見ていく指標」として、令和４年度から令和６年度の全校生徒向け「学校生活アンケート」を用いた。

4. 実践　弥栄中学校の取り組み

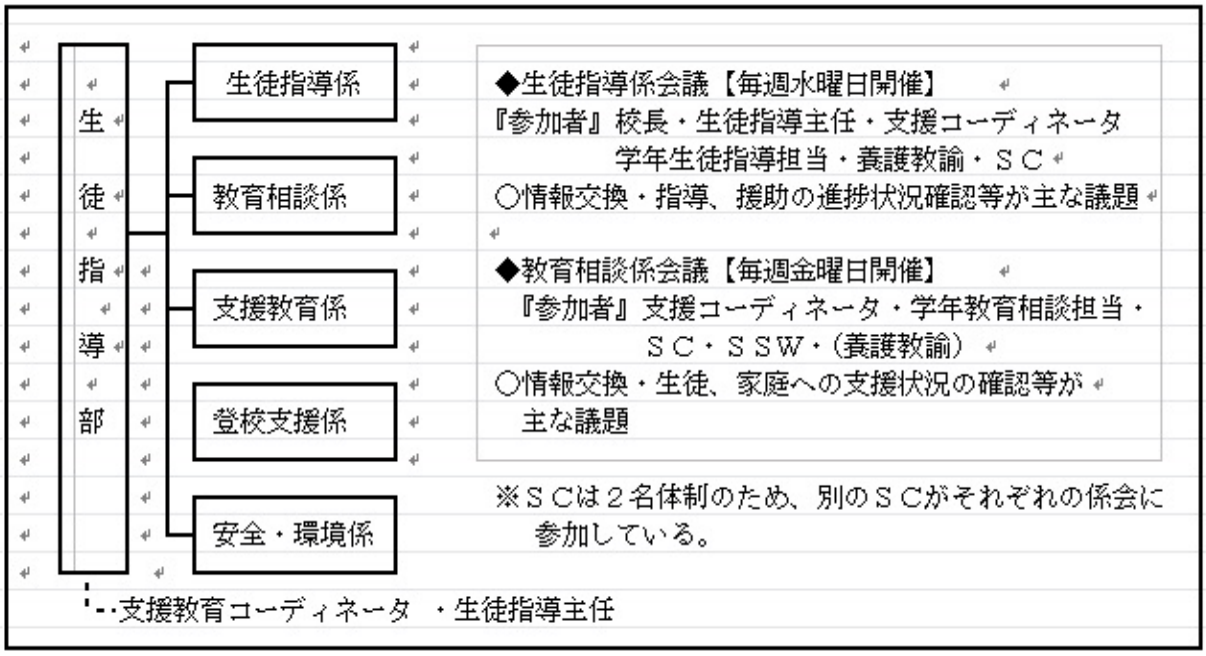
本校では、生徒が役割を担い、他者と協働し、主体的に学校生活に参画できるよう、日常の活動そのものを「経験の場」として設計してきた。本章では、日常的な関係づくりの仕組み（例：つながりタイム）、個別の思いを受け止める場（例：あのねタイム）、授業や行事での 役割経験の設計、生徒会活動の改善など、プロアクティブな生徒指導を意図した取組を、生徒の経験をつくり出す“介入設計”として整理して述べる。

4-1　チーム学校による生徒指導体制の構築

生徒指導が、適切かつ有効に機能していくためには、チーム学校による生徒指導体制の構築が何よりも大切である、組織的・実効的な生徒指導体制の構築し、学校と専門家･関係機関及び地域・家庭との連携・協働の強化をすることが求められる。

（1）支援教育コーディネータを核とした校内生徒指導体制の確立と専門家・関係諸機関との連携

弥栄中学校生徒指導部の校内組織は、特別なものはありません。その特徴をあげるとすると、生徒指導部の推進役が、支援教育コーディネータと生徒指導主任の２人体制をとっていることがあげられます。生徒指導課題への適切な対応（指導・援助）を生徒指導主任が担い、教育相談を中心とし未然防止・発達支援をコーディネータが担っている。そして支援コーディネータには、本校のサポートルーム主任が就いている。



◆支援教育コーディネータ

【主な役割】

○教育相談（定期、あのねタイム）
○つながりタイム（ＳＳＴ）
○登校支援ルーム、登校支援委員会（不登校対策）
○虐待関係
○支援教育、サポートルーム連携

【専門家、関係機関】

○子育て支援センター、児童相談所との連絡調整
○市教育相談課・支援教育課との連絡調整
（ＳＣ．ＳＳＷ含む）

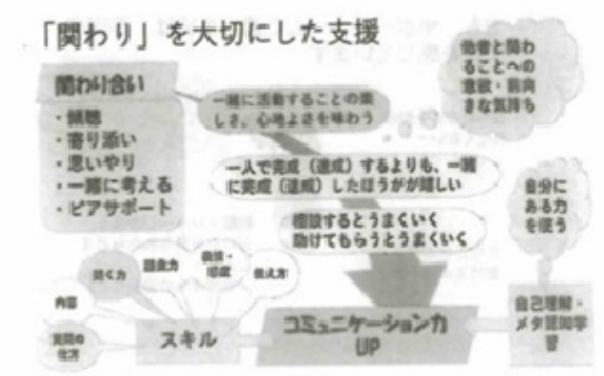
◆ 生徒指導主任

【主な役割】

○課題対応（指導、援助）
○約束、マナー、ルールの検討
○犯罪防止教室等の企画運営
○安全、環境教育

【専門家、関係機関】

○他校との連携・情報交換
○市学校教育課（人権生徒指導班）
○警察（学警連）との連携・情報交換



左の表は、サポートルームで行われている支援を表している。特に中心となっている「関わりを大切にした支援」を、校内の生徒指導にも取り入れながら、支援コーディネータ・生徒指導主任の２人が分担して校内の生徒指導を推進している。

＜サポートルームの紹介＞

◆設置の目的

学校生活において対人関係やコミュニケーションに困難さを抱えている生徒を支援する通級指導教室として、相模原市の６つの中学校に設置されている（緑区２校中央区２校南区２校）

特にコミュニケーションに課題を持つ生徒のためのトレーニングや必要なスキルを身につけさせることを目的とする。また、地域のセンター的役割として、自校の校内支援や近隣中学校への支援体制の構築についてサポートする。

◆通級生徒

自校「弥栄中学校」を含む中央区の近隣の中学校６校の生徒が対象

保護者による教育委員会の手続きを経て通級する。

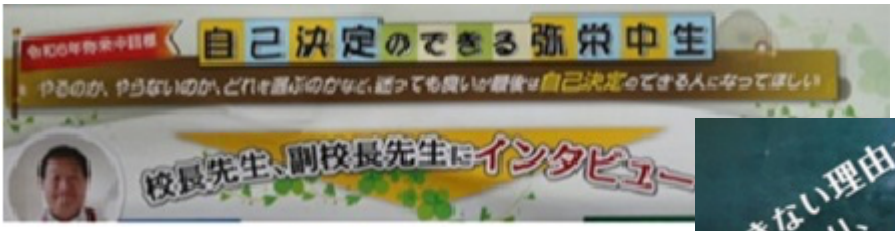
◆授業　毎週１回、２時間連続の９０分授業を行う。（休憩時間を含む）

◆年間計画

月	行事	コミュニケーション表現力	ソーシャルスキル学習 生活スキル学習	集団行動に必要な力 情緒の安定		適応力
4	オリエンテーション	サポートルームオリエンテーション				・コグトレ
5	個別見学・体験授業	○聴くスキル ・カラーパズル ○会話スキル ・自己主張 ・意思表示 ・分かりやすい説明 ○語彙力 ・階段詩 他	○プラス思考 ○考え方・とらえ方を広げる ○視点の変換 ○他者理解 ○自己理解 ・自分を知る ・エゴグラム ・やりたいこと集め ○進路選択について 他	○不安緊張軽減 ○感情コントロール ・五月病 ・自分の感情に気づく ○夏休みの目標 ○２学期を乗り切るコツ 他	グループ学習	・感覚統合運動 ・視知覚認知トレーニング ・集中記憶課題
6	個別見学 体験授業 教育相談 学校向け見学・説明会					
7	連絡会議 保護者面談					
8		２学期の目標確認				
9	個別見学・体験授業	○会話スキル ・相手にとって分かりやすい伝え方 ・5W1H ・ステップアップスピーチ	○やる気のコツ ○友達作りのコツ ○関わり合いの距離 ○優先順位のつけ方 ○生活スキル ・身だしなみ	○実行機能力アップワーク ○感情コントロール ・ストレスの軽減方法 ・思い込み ・悩みの整理	グループ学習 調理実習	・コグトレ ・感覚統合運動 ・視知覚認知トレーニング
10	個別見学・体験授業					

（2）キャッチフレーズの周知

学校の教育活動は、学教教育目標の具現化を目指して行われている。弥栄中学校でも、毎年グランドデザインを作成し、職員、保護者、地域に示し、年度の重点教育活動等に理解と協力を求めている。学校として目指すものを、生徒にもわかりやすく理解してもらうために、１学期の始業式や 学校便り、ＰＴＡ広報などで「キャッチフレーズ」を提示した。





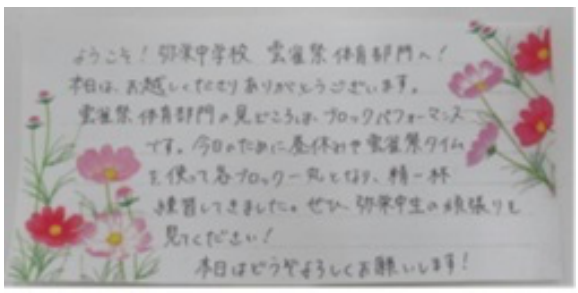
令和５・６年度のキャッチフレーズは、「自己決定のできる弥栄中生」とした。コロナ禍がようやく収まりつつあり、様々な教育活動が、ある程度元通りの形で行えるようになってきたが、自分できめられない生徒がふえたように思えたからである。「やるのか、やらないのか、どれを選ぶのか、迷っても良いが、最後は自己決定のできる人になってほしい」という願いを、生徒・職員・保護者・地域で共有し、教育活動に取り組んだ。

（3）保護者・地域との連携

筆者が副校長として弥栄中学校に赴任した平成３１年（令和元年）４月の入学式に来ていただいた来賓の方々（地域関係者の方々）は、６０名前後であった。コロナ禍後、保護者の参加が元通りに　なった後の入学式や卒業式への来賓の方々の参加は、平均１５名前後となった。地域関係者の方々の卒業式や入学式への参加が、必ずしも地域連携とは言えないが、コロナ禍前後で、地域の方々の教育活動参加へのハードルが上がったことは確かである。地域との連携は、地域の方々に来校を願い、教育活動に参加していただくことをメインに計画、実践してきたが、生徒、職員が地域に出て行く連携を模索した。

◆保護者・地域の方々に来校を願い実践している連携活動

毎年６月中旬の土曜日に、ＰＴＡ主催の「クリーン・グリーン大作戦」という名の地域清掃、緑化活動を行っている。生徒・保護者・地域関係者・教員・夜間施設解　放利用者の方々にボランティアとして参加していただい　ている。定期テスト後の土曜日であり、部活動の総合体　育大会前でもあるのだが、全校の３分の１程度の２００名前後の生徒が参加している。保護者・地域の方々も１００名以上の方々が参加している。ここ数年は、非常に暑い中での活動となったが、活動後に配られる飲み物を楽しみに、心地よい汗を流している。





また、学校祭の体育部門では、敬老席を復活させ、生徒の祖父母や地域のお年寄りの方々に参観していただいている。敬老席は好評を頂き、午前も午後もほぼ満席の状態であった。生徒会の発案で、一筆箋に生徒手書きのお礼状を添えることとした。

◆生徒、職員が地域の活動に参加する連携活動

○「こどもまちづくり会議」



近隣の中学校と本校の生徒会の役員が中心となり、地域のまちづくりについて、意見交換を行っている。右の写真は、令和６年１２月に行われた「こどもまちづくり会議」のメンバーと相模原市長との意見交換会の様子である。この会議では、事前に行った中学生へのアンケートを基に、生徒たちの要望事項やまちづくりについての意見などが数多く出されていた。

○「地区懇談会」

コロナ禍前は、夜間にＰＴＡの地区委員、地域の方々、教職員で行われていた地区懇談会に、代表生徒数名が参加する形をとった。土曜参観後のＰＴＡ総会・部活動保護者会の後に、地区ごとの懇談会を設定し、生徒、保護者、教職員、地域の方々で居住地区についての情報交換・意見交換を行う機会とした。保護者会帰りの保護者の参加を望んだが、多くの参加は見られなかった。しかし自治会長さんなどからは、中学生と話をする機会ができて良かったという声が上がった。

○「もみの木コンサート」



地域の青少年健全育成協議会主催のクリスマスコンサートに、吹奏楽部の生徒が参加している。このコンサートは、中央公民館区の小学生、中学生、高校生、地域の方々参加するもので、会場とのなる体育館は、立ち見の参観者で埋まるほど、大きなイベントとなっている。このように地域のイベントに部活動が参加することはよくあることではあるが、弥栄中学校は、相模原弥栄高校の目の前にあり、事前に合同練習等をしていただき、当日も合同演奏を披露する機会に恵まれる。生徒たちも楽しみにしているイベントである。

○「長期休業中に職員が地域の施設を訪問する」

◆ 公民館で開放されている学習スペース

夏期休業中に、学校ではサマーセミナーという補習を数日間行っているが、サマーセミナーの設定がない日に、地域の公民館で開放されている学習スペースを訪問するというものである、事前に公民館から開放スケジュール頂き、生徒に配布し、活用を奨励する。職員は１回は訪問することとしたが、あくまで地域の学習スペースなので、教えるというよりも励ましの声かけを中心にすることとした。

◆ 放課後デイサービスへの職員訪問

放課後デイサービスを利用する子供たちが、どのように過ごしているかを、なかなか知る機会がなかったので、地域の２つのデイサービスに見学の機会を頂いた。２カ所事業所からの複数の機会を頂いた。夏期休業中にどちらか１回は見学するものとした。筆者自身も、デイサービスの見学は初めての経験であったので貴重な機会となったが、日頃からの連携を構築していくには、まだまだ課題があるように感じた。

ここにあげたもの以外にも、生徒や教職員が地域に出て活動するものが数多くある。また模索しても実現できていないことも数多く存在する。その中で、筆者が最も行いたかったことは「地域防災訓練」への生徒参加である。南海トラフ地震などの大規模災害に見舞われたときに、中学生は地域の活動の担い手にならなければならないという思いがあり、その時に顔の見える関係が必要だと考えている。実際、地域の会議等で、「地域の防災訓練に生徒を参加させたいので、機会があれば連絡を頂きたい」ということを発信し、依頼もあったのだが、定期テストの日程等と重なり実現することができなかった。改めて、地域との連絡調整の大切さを実感した。

4-2　生徒指導と学習指導の一体化

平成２９年「中学校学習指導要領解説総則編」には、生徒指導は、学校教育全体を通じ、学習指導と関連付けながら充実を図るとある。

> 学校教育において、生徒指導は学習指導と並んで重要な意義をもつものであり、また、両者は相互に深く関わっている。各学校においては、生徒指導が、一人一人の生徒の健全な成長を促し、生徒自ら現在及び 将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、学習指導と関連付けながら、一層の充実を図っていくことが必要である。（一部抜粋）

生徒指導提要においても、教科の指導と生徒指導の一体化が求められており、「授業は全ての児童生徒を対象とした発達支持的生徒指導の場となる」とされている。また、あるべき授業として、次の４点があげられている。

> (1) 自己存在感の感受を促進する授業
> (2) 共感的な人間関係を育成する授業
> (3) 自己決定の場を提供する授業
> (4) 安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業

弥栄中学校では、校内研究としてキャリア教育を軸とした授業づくりをすすめてきた。相模原市のキャリア教育は、社会的・職業的自立に向けて必要な４つの力を、小中一貫の９年間で育むことを目標としている。４つの力とは、つながる力「人間関係形成能力」・乗り越える力「情報活用能力」・見通す力「将来設計能力」・自律する力「意思決定能力」である。中学校区（弥栄中学校、弥栄小学校、並木小学校）では、「つながる力」「乗り越える力」を小中一貫で育みたい力として共有し、授業公開や研究協議を行ってきた。授業の様子を紹介した学校だよりを次に掲載する。

＜授業の様子を伝える学校便り＞　三匹のこぶた裁判（ＮＨＫ for school ）

３年生の社会科の授業での一コマです。裁判員裁判の模擬授業が行われていました。豚のトン三郎が、兄弟をレンガの家にかくまい、オオカミから守っています。外からの侵入を防ぐため、窓に板を打ち付けました。煙突からの侵入に備えて、煙突下の暖炉には大きな釜に煮えたぎった湯を入れて置いています。オオカミの家には「食えるものなら食ってみろ」というような挑発するような手紙があったというような情報もありました。やがてオオカミは煙突から侵入しますが、熱湯の中にすべり落ち、トン三郎によって蓋をされ、死んでしまいます。この行為が、計画的な殺人罪（殺狼罪）にあたるか、正当防衛かを考えるという内容です。

事件の内容を説明したビデオを視聴した後、グループでの意見交換が始まりました。５分ほど経過した頃、話し合いが中断され、数人の生徒達が、それぞれの意見を発表しました。発表された意見は、「罠を仕掛けているのは計画的であるから有罪」というものが、どちらかというと多い気がしました。ふたたびグループでの活動が再開します。その時、ある生徒から「校長先生はどう思いますか？」と声をかけられました。その生徒の最初の考えは有罪です。生徒達の意見交換に過度の影響を与えてはいけないと思うので、あくまでも個人的な意見ということを前置きに、「侵入を許してしまったら、家族が食べられてしまうので、罠といわれようとも、オオカミが落ちてきた釜に蓋をするのは、正当防衛だと思う。」という意見を言いました。するとその生徒は、「確かに校長先生の言うとおりですよね。ありがとうございました。」と言って、再びグループの意見交換に戻っていきました。授業も終盤にさしかかり、再び数名の生徒達がそれぞれの意見を発表し、学級での判決を出す時がやってきました。このクラスが出した判決は、１５人対１８人で無罪（正当防衛）でした。



さて、校長に意見を求めてきた生徒の出した最終判決は．．．．有罪でした。自分と違う意見を否定するのではなく、相手の意見をしっかりと聞き、認める。「校長先生が言っていたから」というもので決めない。最終的には自分で考え、自分で判断して決断しているその姿に、たくましさを感じ、とてもうれしく思いました。

相模原市で推進しているキャリア教育の身につけさせたい力の一つに、「つながる力」というものがあります。この力は、単純に「皆で協力して、話し合いで物事を進めていく力」ではありません。しっかりとした意見交換を行うために、相手を認め相手の意見をしっかりと受け止める力、自分の意見を持ち的確に相手に伝える力が必要となります。このような力を身につけた上で、人と人とのつながりを大切にすることが求められています。子ども達をとりまく現代社会で、大人達がその範となっているとは言えない状況もあるかもしれませんが、未来を担う子ども達には、是非身につけてもらいたい力です。弥栄中学校の生徒達にも、つながりを大切にしながら、自分で決断し、自分の意見をしっかりと伝えることのできる大人になってほしいと思っています。

先ほどあげたあるべき４つの授業のうち、(2)共感的な人間関係を育成する授業、(3) 自己決定の場を提供する授業を意識したものであったように思われる。学校としても、授業が単なる知識や技能の習得の場ではなく、将来に必要な力を育む場であることを、保護者や地域に発信していくことが大切である。

毎日の授業においては、(1) 自己存在感の感受を促進する授業づくりが大切だと考えている。授業において、生徒が「一人の人間として大切にされている」と感じ、自分を肯定的に捉える自己肯定感や、認められたという自己有用感を育む工夫が求められる。そのために毎時間の授業では次の５点を行うことを標準とした。

＜毎時間の授業で取り組む授業の 5 項目＞
①授業のめあて（身につけたい力）を提示・確認する。
②誰でも必ず参加できる活動（話し合いや作業等）を時間内に一回は設定する。
③考える時間を確保し、自分の考えを持たせる機会を作る。その際には、他の意見をしっかりと聞き、発言について笑ったりばかにしたりしないとういうルールを徹底する。
④満点テストを国社数理英の 5 教科で毎時間行う。
⑤授業の振り返りを行う。

満点テストとは、授業の振り返りの前に、今日の授業のポイントやこれだけは絶対に覚えてほしいというものなどを確認テストとして 1 問出すもの。解答が黒板に書かれていたりしてもかまわないが、出席生徒全員が〇をつけてから振り返りに入るということを確実に行うものである。SDT でいう「有能感」を高めることを目的として行った。満点獲得という成功体験を積み重ねさせることが目的なので評価の対象にはならないが、導入当初、全員が満点という問題は、意外とつくるのが難しいという声があがり、満点テストを意識した授業づくりも行われるようになった。

4-3　生徒の「成長・発達を支える生徒指導」への転換　（ガイダンスとカウンセリング）

発達支持的生徒指導は、児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、その発達の過程を学校や教職員が支えていくという視点 に立って行われるものとされている。

教職員の児童生徒への挨拶、声かけ、励まし、賞賛、対話、及び、授業や行事等を通した個と集団への働きかけのなかで、社会的資質・能力の育成や、共生社会の一員となるための市民性教育・人権教育 等の推進などをしていくことが求められている。

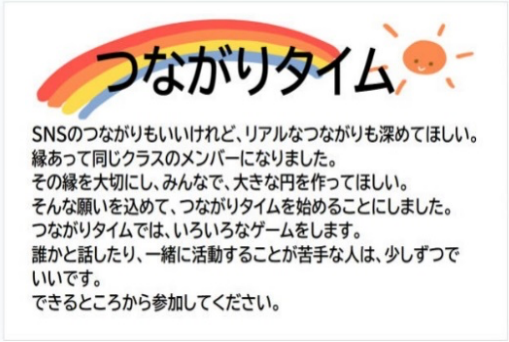
学習指導要領には、児童生徒の発達を支援する際には、主に集団の場面で必要な指導や援助を行うガイダンスと、個々の児童生徒の多様な実態を踏まえ、一人一人が抱える課題に個別に対応した指導を行うカウンセリングの双方により、支援することある。生徒指導提要においても、ガイダンスとカウンセリングは、教員、SC、SSW 等が協働して行う生徒指導において、児童生徒の行動や意識の変容を促し、一人一人の発達を支える働きかけの両輪として捉えることができるとある。

弥栄中学校では、サポートルームで行われている「関わりを大切にした支援」を取り入れてきたことは前に書いたが、この支援の基盤となるガイダンスとカウンセリングを、SDT の「関係性」を高めるために計画、実践した。

(1) つながりタイム

他の学校でも同じような状況であったと思われるが、コロナ禍による生徒たちのコミュニケーション力の低下は、弥栄中学校でも顕著であった。意図的にしかけを作っていかないと、コミュニケーションを始めるきっかけをつくることや継続することが苦手な生徒が、以前よりも多くなってきているように思えた。弥栄中学校では、「つながりタイム」という時間を定期的に設定し、関係性を育む SST「人間関係づくりワークやコミュニケーションゲーム」などを行っている。

＜つながりタイムの実施方法＞
①時間　朝の学級活動時（月２回程度）
②場所　各学級教室
③方法　共有ドライブに格納されているスライドを学級担任任が選択し、班単位の活動として行う。
※学級担任は巡回しながら，時には活動に加わるなどして、できるだけ円滑にゲームが進むようにする





＜お題のスライド＞
③肉料理と言えば？　④夏ということばからのイメージする色と言えば？
⑤街でよく見かけるファミレスと言えば？　⑥卵料理と言えば？



＜共有ドラブに格納されているつながりタイムスライド＞
●意見を合わせよう●十人十色●ジャストワン
●語彙の王様●三択プロフィール●かぶっちゃやーよ
●マス・スマート●連想しりとり●ガムトーク
●１０分間チャレンジ●ワードウルフ●誕生日リング　等々

（2）定期教育相談とあのねタイム

教育相談は、生徒指導から独立した教育活動ではなく、生徒指導の一環として位置づけられるものであり、その中心的な役割を担うものと言える。

◆定期教育相談

弥栄中学校では学期に一度、全校生徒を対象に６日間の相談期間を設定し、教育相談を行っている。

＜定期教育相談の確認事項＞
・学級担任を中心として、全職員が相談活動にあたる
・学級担任は、生徒全員との相談を計画的に行う。時間は一人１０分とし、さらに必要な場合は後日改めて行う。
・プライバシーの尊重や相談のしやすさ、相談する機会を全生徒に等しく保証することなどを考慮し、学級担任一人対生徒一人での相談を基本とする。
・狭い空間で「二人きり」という状況を避けるために、必ず各教室で行う。
・学級担任は、事前に悩みのアンケート実施、集約して、面談計画表を作成し、学年黒板に掲示する。
・生徒理解を深め、諸問題の未然防止、早期発見、対応に努める。
・学級担任以外と相談したい生徒は、相談したい職員に直接申し込む。
・相談環境を整えるため、控え室を設置し、自習や読書など静かに待てるように指導する。

◆あのねタイム
弥栄中学校では、年間を通して誰でも気軽に相談できる時間「あのねタイム」を設定している。

○ねらい
・生徒がいつでも気軽に相談できる場を設定することで、安心して学校生活を過ごせるようにする。
・生徒の悩みや心配事などを早期発見、早期解決する。
・相談をきっかけに課題を整理し、ＳＣやＳＳＷなどの関係機関と連携して解決に当たる。
○実施日時　　毎週金曜日　放課後
○実施方法
・当日職員室に直接相談に来る。
・前日までに「あのねタイムフォーム」で申し込む。
○相談対応職員
・管理職を含む学年外職員（養護教諭は除く）
・各学年の副担任職員



５．結果

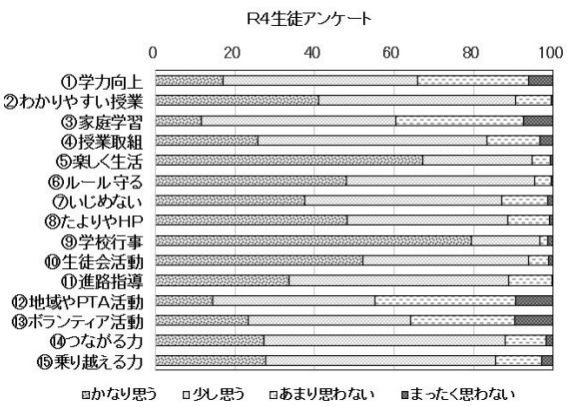
前章で述べたように、常態的・先行的（プロアクティブ）な生徒指導が意図的計画的に推進できるように、様々な取り組みを行ってきた。それらが、生徒の自己有用感を形成するうえで有効であったかどうかをはかる指標として、令和４年度から令和６年度の全校生徒向け「学校生活アンケート」を参考とした。

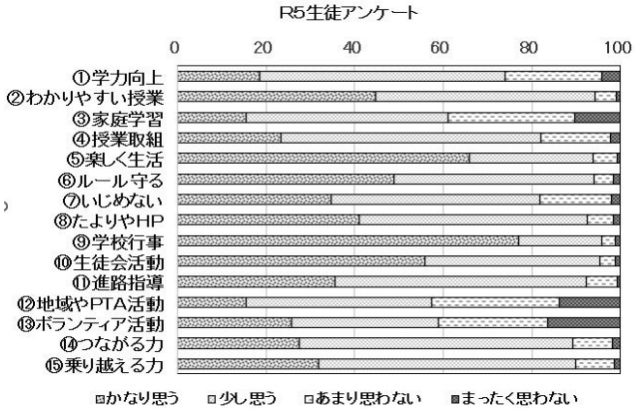
このアンケートは、各学年共に毎年１１月中旬に、学校生活全般に関する意識調査として経年的に実施している。また、保護者（地域関係者）・教職員にも同様のアンケートを行っている。アンケート項目は次の通りである。

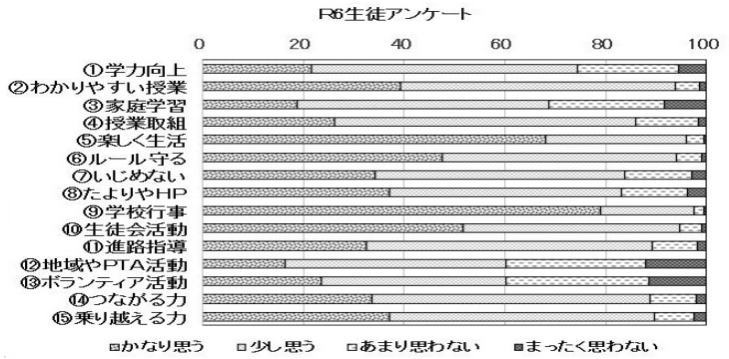
＜生徒向け　学校生活アンケート＞
①　あなたは、今年度学力が向上したと思いますか
②　弥栄中では、授業を工夫し、わかりやすい授業をしてくれていると思いますか
③　あなたは、家庭学習の習慣が身についていますか
④　あなたは、各教科の授業に意欲的に取り組んでいますか。
⑤　あなたは、学年や学級の中で友だちと楽しく生活していますか。
⑥　あなたは、ルールやマナーを守り、基本的な生活習慣が身についていますか。
⑦　弥栄中は、いじめのない学校づくりに努めていると思いますか。

⑧　弥栄中は、学年・学校だよりやﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ等で学校の様子をよく知らせていると思いますか。
⑨　あなたは、雲雀祭などの学校行事に意欲的に参加しましたか。
⑩　弥栄中の生徒会活動や委員会活動は、充実していると思いますか。
⑪　弥栄中は、将来に向けての進路指導が充実していると思いますか。
⑫　あなたは、地域やＰＴＡの活動に良く協力していると思いますか。
⑬　あなたは、ボランティア活動に積極的に参加していますか。
⑭　弥栄中生は、つながる力が身についていると思いますか。
⑮　弥栄中生は、乗り越える力が身についていると思いますか。

◆アンケート結果（令和４年度～令和６年度）

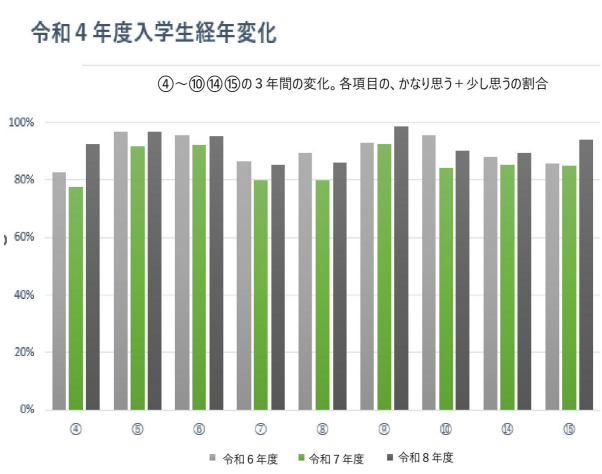






◆令和４年度入学生の３年間の経年変化

質問項目⑥授業に意欲的に⑤楽しく生活⑥ルールやマナーを守る。⑦いじめのない学校⑧学年・学校だよりやホームページ⑨学校行事に意欲的⑩生徒会活動や委員会活動⑭つながる力⑮乗り越える力の「かなり思う＋少し思う」の割合について、令和４年度入学生の３年間の経年変化は次の通りである。



◆学ぶ意欲と学力向上に関するもの（①～④）

これらの質問項目の中では、多くの生徒が②授業はわかりやすく（９４％）、④意欲的に授業に取り組んでいる（８６％）と思っているのだが、およそ２５％の生徒が、学力向上に課題があると感じている。

◆安心安全に関するもの（⑤～⑧）

この質問項目の回答は概ね高評価であった。特に、⑤（楽しく生活）、⑥（ルールを守る）への回答は「かなり思う」「少し思う」を合わせて、共に９５％程度であった。④いじめのない学校づくりに関しては、８４％程度の生徒が「かなり思う」「少し思う」と回答している。また、⑦家庭学習については、毎年６０％台後半と低い割合を示している。

◆自己有用感の育成に関するもの（⑨～⑮）

この質問項目への回答は、質問により回答の違いがみられる。⑨（学校行事）、⑩（生徒会活動）への回答は「かなり思う」「少し思う」を合わせて９５％前後の高評価であった。⑤（地域やＰＴＡ活動）⑬（ボランティア活動）は、ともに６０．２％となっている。⑭つながる力⑮乗り越える力は、「かなり思う」「少し思う」を合わせて、共に９０％近くで、高い評価であった。

◆令和４年度入学生の３年間の変化

どの項目も「そう思う＋少し思う」の割合が、一年生の時に比べると二年生では若干割合が低くなり、三年生になると再び高くなるというＶ字型の結果となった。

６．考察

第５章で示した変化は、SDT が示す三つの基本欲求（自律性・有能感・関係性）が、日常の活動や役割経験を通して徐々に満たされていった可能性が考えられる。特に、行事や生徒会活動での役割経験は「自分は役に立てている」という感覚（有能感）を、友人関係の広がりや協働場面は「関係性」を支える経験となり得る。また、ロールフルネス研究（加藤・鈴木ほか, 2025）が示すように、役割を持ち、それが果たされていると実感できることは、適応感や前向きな自己像の形成に寄与する。本研究の結果は、このような理論的背景と通じる部分がある。

6-1　学ぶ意欲と学力向上に関するもの（①～④）

「授業のわかりやすさや意欲的な取り組みが高評価（９４%～８６%）であるにもかかわらず 、約２５%の生徒が学力向上に課題を感じている点は、実践の重要な課題を示す。満点テストは、SDT でいう有能感（自分はできるという感覚）を高めるための有効な成功体験を提供したが、この短期的な成功体験が、学習内容の定着や応用力の獲得といった長期的な学力向上の実感に結びついていない可能性がある。今後は知識・技能の確認に留まらず、獲得した力を実生活や探究的な学習に活用できたという応用的な有能感を実感させる振り返りのあり方等について、授業改善を継続する必要がある。

また家庭学習の習慣がついていないことで、保護者からも宿題を出してほしいという意見が多数寄せられていた。宿題を増やすことが、家庭学習の習慣化につながるとも思えないが、学年内で調整して、一定の宿題を出すことにした。しかし結果的には、宿題をやってこない生徒が増えてしまった。このような状態からの脱却を図るために、毎週木曜日の放課後に、諸活動をなくし、学年の職員を中心に、宿題をやってこない生徒を主な対象とした補習を行った。できないからやってこない生徒に少しでも寄り添うことを目的に、全校体制で取り組んだ。補習の方法等には、まだまだ工夫の余地が残されているが、教科担当にこだわらず、一緒に宿題に取り組むことで、少しでもその数が減ることを願い、継続して行っている。

6-2　安心安全に関するもの（⑤～⑧）

安心・安全な学校生活に項目が、比較的高い数値を示しているのは、「つながりタイム」などに代表される人との関わりを大切にした支援や教育相談などの充実を地道に図ってきたことの成果であるように思われる。生徒と

生徒、生徒と教職員の「関係性」が向上し、安心して諸活動に取り組むことができている。

しかし、いじめのない学校作りについては、１５％程度の生徒が不安を抱いているので、できる限り１００％に近い結果が得られるように、指導支援の充実を図っていかなければならない。とはいえ、いじめは、いつ何時おこるかわからないこともあるので、生徒たちには、「いじめ緊急フォーム」を設定して、個々の端末から、いつでもいじめを訴えることができるようにしている。職員にも、「いじめ緊急フォーム案件については、迅速・丁寧・最優先でという意識」が定着している。いずれにせよ、いじめの防止については、学校全体で組織的に取り組まなければならないものである。

6-3　自己有用感の育成に関するもの（⑨～⑮）

「学校行事や生徒会活動における高い肯定的な回答率（９５%前後）は、チーム学校としての目標共有のもと、生徒自身が活動を主体的に企画・推進する機会が組織的に提供されたことの成果である。これは、SDT における自律性の基本的欲求（自分で選んで動けている感覚）が、特に上級生を中心に満たされたことを強く示唆している。例えば、体育部門における敬老席の復活と生徒手書きのお礼状の取り組みは 、生徒たちが地域との肯定的な関係性を意識的に構築し、その中で他者の役に立つという具体的な自己有用感を獲得した定性的な事例として位置づけられる。また、生徒同士が様々な活動に取り組む際に、一人でするのではなく、仲間と協働して取り組む土台ができていることも必要である。学校祭などでは、創意工夫をしながら主体的に異学年交流を進め、３年生が導き、２年生が支え、１年生がついて行くというような関係性ができている。３年生を中心に自分たちで考え、主体的に行動する場ができている。SDT の「自律性」を高めている。また、それぞれの学年での役割が明確になっており、その責任を果たしながら、成長していく姿を数多く見ることができる。このような取り組みが、「関係性」を更に向上させている。

ボランティア活動やＰＴＡ活動への参加については、活動の場の設定等、工夫の余地が残されている。生徒会の活動として、挨拶運動や朝清掃ボランティアなどを設定し、数多くの生徒が参加をしていたが、活動の広がりについては、やや課題が残っている。

つながる力、乗り越える力については、小中一貫のキャリア教育で身につけさせたい力として、この二つの項目を設定している。近隣小学校と連携し、記録をとって授業作り等に生かしている。一年間に３回、それぞれの学校を訪問し、授業研究・協議・情報交換を行っている。小中学校９年間の児童生徒の力の伸長を教職員が共有し、児童生徒にフィードバックしていくことは、成長を支える手段として、有効である。

6-4　令和４年度入学生の３年間の経年変化

３年間の変化については、どの項目も「そう思う＋少し思う」の割合が、学年が進むにつれて高くなることが理想であるが、一年生の時に比べると二年生では若干割合が低くなり、三年生になると再び高くなるというＶ字型の結果となった。Ｖ字型の傾向は 、２年生が先輩・後輩に挟まれる不安定期であるという一般的な学校組織の課題を反映していると思われるが、この結果は、つながりタイムやあのねタイムを通じて築いてきた関係性（人とつながれている感覚）の支援が、集団が不安定化しやすい２年生の時期において、生徒同士の横のつながりや自己表現への自信を持続的に支える上で、さらなる工夫の余地を残していることを示唆している。具体的には、２年生を対象としたリーダーシップ育成や、集団内での役割移行を促すためのガイダンス等を展開するなど、学年発達段階に応じたプロアクティブな支援が必要である。３年生になると「自分たちがやらなければ」という意識が芽生え、意欲的に取り組む姿勢が見られる。行事に意欲的という項目では、３年生の９９％が「そう思う、少し思う」と回答しており、殆どの生徒が最上級生としての自覚と責任を持って行事に取り組んでいて、事後の達成感や自己有用感はかなり高まったと思われる。

７．まとめ

弥栄中学校の「関わりを大切にした支援を基盤とした生徒指導」により、SDT の３つの基本的欲求を全て満た

すことができたかと問われると、自信を持って「はい」と答えるにはなかなか難しい面もある。しかし多くの生徒の基本的な欲求が満たされるように、試行錯誤、創意工夫をしてきたことは確かである。自己有用感形成の取り組みを、キーワードとしてまとめると次の様になる。

① チーム学校による生徒指導体制の構築
・学校・家庭・地域での目標共有・支援と指導の二本柱指導体制（両立）
・生徒や教職員が地域に出ていくアウトリーチ型連携
② 生徒指導と学習指導の一体化
・日々の授業での成功体験・キャリア教育の視点を取り入れた授業改善
③ 生徒の「成長・発達を支える生徒指導」への転換
・「関係性を高めるガイダンスとカウンセリング

今回の研究実践において、工夫の余地が残されているものも多数ある。授業改善の取り組みなどは、教師にとって、まさに永遠の課題である様にも思われる。生徒支援・指導の改善を模索していく際には、これらのキーワードを意識しながら、SDT でいう３つの基本的欲求を満たし、自己有用感向上へとつなげていくことを考えたい。また、本研究にはいくつかの限界がある。第一に、アンケート項目は心理学的尺度ではなく、あくまで「代わりに見ていく指標」である点である。第二に、他校と比較していないため、本校の取組に固有の影響を分離して論じることはできない。第三に、質的データ（生徒の語り、教師の観察記録等）を併せて分析できていないため、変化の背景を深く掘り下げることには限界がある。今後は、複数校での比較検討や、質的データとの統合的分析が望まれる。

生徒指導の取り組みは、日々の実践の積み重ねである。生徒たちは、毎年異なった生徒指導上の課題を抱えて入学してくる。ここにまとめた指導や支援が、次に功を奏さないということもよくあることである。その年の学校や学年の状況に合わせて、日々アップデイトしていくことが必要である。しかし指導・支援の核となる部分は、揺れることなく、チーム学校として、地域の力などを借りながら、総力で取り組まなければならい。弥栄中学校の生徒指導の取り組みは、次の４つのサイクルを基本として行ってきた。①チーム学校として、目標を共有する。②関わりを大切にする支援を充実させ、安心して生活できる場を提供する。③主体的に協働して取り組む学校行事、授業などを推進する。④振り返りにより身につけた力などを実感させ、次につなげる。このサイクルを軸に、実際の指導では、生徒の状況に合わせて指導・支援を創意工夫しながら展開していくことが大切である。

またこのような生徒指導を効果的に行うためには、教師の指導力、支援力、協働推進力などをバランス良く発揮できる人材が求められる。突出した力に頼ることのない、皆で同じ方向に向かって指導・支援に取り組むことが、生徒が生き生きと学び、活動する学校をつくっていくように思う。そして、生き生きと学び、活動する姿こそが、教師のやりがいを生み出すように思う。

引用文献

大対香奈子（2020）「学校規模ポジティブ行動支援 （SWPBS）における実行度の評価」『行動分析学研究』34(2), 229-243.

角田豊（編著）（2019）『子どもとの関係性を読み解く 教師のためのプロセスレコード』金子書房.

加藤大樹・榊原葵・鈴木美樹江・浅井継悟・酒井麻紀子（2025）「パーソナリティ特性を起点としたロールフルネスの生起モデルと自尊感情との関連」『人間環境学研究』23(1), 31-35.

鎌田淑博・池田誠喜・芝山明義（2019）「中学生の自己有用感と生活満足感との関連」『教育実践学論集』20, 49-58.

河本愛子（2014）「中学・高校における学校行事体験の発達的意義：大学生の回顧的意味づけに着目して」『発達

心理学研究』25(4), 453-465.
木村直子・畠中宗一（2020）「子どもたちの『関係性を生きる力』尺度に関する研究」『鳴門教育大学研究紀要』35, 276-285.
久保田（河本）愛子（2021）「中学・高校での学校行事体験が大学生活に及ぼす長期的効果」『日本特別活動学会紀要』29, 31-40.
櫻井茂男（2017）『自律的な学習意欲の心理学―自ら学ぶことは、こんなに素晴らしい』誠信書房.
下田芳幸（2025）「 生徒指導提要の 2022 年度改訂版の特徴：旧版との比較を通して」『佐賀大学教職教育開発研究年報』9, pp.283-302.
鳥飼正葵・庭山和貴（2025）「公立中学校における学校規模ポジティブ行動支援 （SWPBS）第 1 層支援の効果」『教育心理学研究』73(2), 106-120.
文部科学省（2022）『生徒指導提要 （改訂版）』 文部科学省.
山田真紀（2017）「生徒会活動の人間形成機能についての実証的研究」『日本特別活動学会紀要』25, 39-48.
Ryan, R. M., & Deci, E. L.（2018）Self-Determination Theory: Basic Psychological Needs in Motivation, Development, and Wellness. New York: Guilford Press.

［Practical Research］

Effects of Proactive Student Guidance on the Development of Students' Sense of Usefulness

― A Practice-Based Study in a Japanese Junior High School ―

Emori Katsuhiro